全国の棚田保全・中山間地域活性化のための情報紙

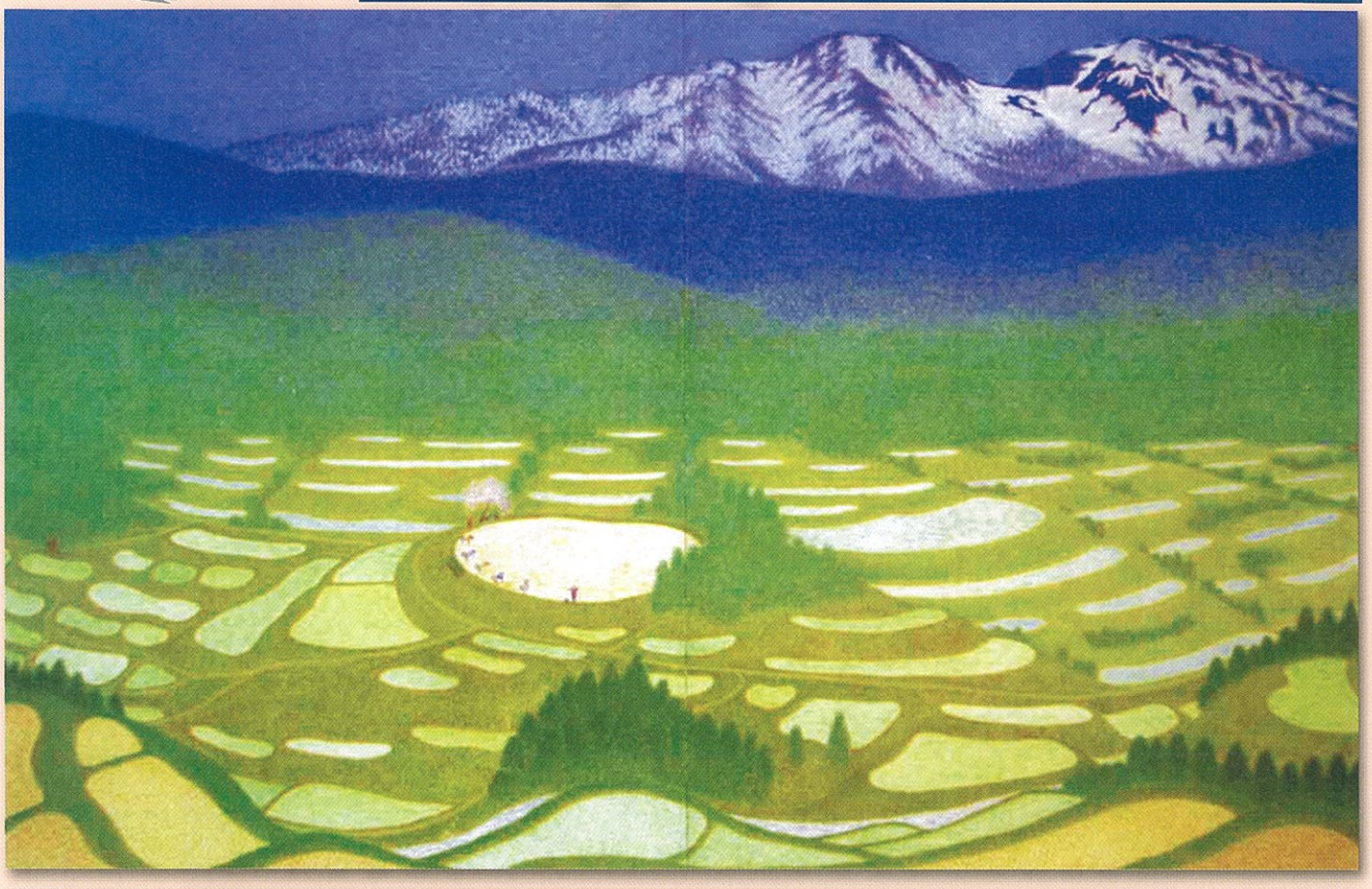
棚田ライステラス

全国棚田（千枚田）連絡協議会

第54号 2010.3.25（年3回発行）

発行／全国棚田（千枚田）連絡協議会

編集／ふるきゃらネットワーク
〒184-0004 東京都小金井市本町6-5-3石塚事務所内
TEL:042-386-8355／FAX:042-385-1180
http://www.yukidaruma.or.jp/tanada/



酒井英次作「牛ひき爺さんの頃」（2004年）146cm×224cm

酒井英次作「新田　春耕秋収図」（2009年）146cm×224cm

いま、農が元気

ホールアース自然学校元代表・
日本エコツーリズムセンター代表理事　**広瀬　敏通**

Message

農が元気だ。そんなことを言うと多くの人は怪訝な顔をするだろう。農地も農村も空洞化は止まらないし、農業が産業としては成り立っていない状況はデーターとしていくらでもある。にも拘らずやはり、農が元気だと言おう。

農家の農業離れは止まらない。だがこれに反比例するように若者や団塊世代などの帰農や滞在型を含む市民農園の活況、企業やＮＰＯなどの組織的な農への参入といった、農的な暮らしや営みに価値を見出す潮流が確実に定着してきた。

それは『よそもの』だけのトレンドでは無い。農民の側でも全国津々浦々、どこの農山村にも元気者がいる事実に出会う。この人々はあきらかに農（業）の未来に対して明るい展望を持っており、みずからの生業に誇りを持っている。同時に驚くほどのアイデアマンで、畑作や畜産の現場でのミニ発明や水路や雑草対策などで、つねに種々の工夫をしていることだ。これはテーマを変えても都市住民やサラリーマンにはほとんど見られないことだろう。手仕事を生業にしている人に見られるこうした前向きな生き方は、訪れる都市の親子や若者などを感動させる要因となっている。

農村の暮らしと手仕事的な自給自助の価値観は、近現代の日本では非効率で貨幣経済に適応出来ない負け組に追いやられてきたし、政策も効率化大規模化一辺倒で日本の国土にそぐわない施策をとっているが、数千年ものあいだ、農山村立国だった日本では、手間を惜しまず季節に忠実に生きる農的な生活がもつ価値観と暮らしへの憧憬は消えることは無い。たしかに、市場原理的な流れは国策で動いてきたことに対して、農的な暮らしの再評価は草の根的なレベルで進行しているために、こうした変化を実態的に捉えているのは、現在ではまだ感度のいいメディアや個人に限られている。私が30年近く続けてきた自然学校もかつて統計にすら表れなかったが、いまや全国に3千校も出来、大きな社会運動になっている。国を動かすというのはつねに無名の元気者たちだったし、それが今、農山村の現場に増殖中だということに注目しよう。

特集

山里の魅力を売り出す！

岡山県美咲町卵かけご飯のポスター（p4）

愛知県新城市四谷千枚田で台風復旧ボランティア（p10）

新潟県佐渡市おけさ柿（p5）

棚田地域といえば、山里（里山）。ここは、棚田での米づくりにとどまらず、複合的な農業をはじめ、山の暮らし、いまも残る農村文化や景観など、多様な魅力の宝庫だ。こうした山里の魅力を見つけ出し、売り出した事例を特集する。米だけに限らない、中山間地域のさまざまな挑戦を応援したい。

滞在型市民農園施設を売り出す

～人と自然と触れあいながら農業体験を!～

●兵庫県多可町●

報告：兵庫県多可町　産業振興課

兵庫県多可郡多可町加美区岩座神（いさらがみ）の地区は、千ヶ峰の麓に位置する20世帯あまりの小さな集落ですが、平成9年度から岩座神棚田保存会を結成し、棚田オーナー制度を開始するなど、町内でも地域活動の盛んな地区です。

日本の棚田百選にも選ばれたその美しい景観は、写真愛好家や千ヶ峰登山客が訪れるスポットとなりました。6月には、棚田の石垣にマンネン草が黄色の花を咲かせます。これも棚田オーナーやボランティアの協力のもと植栽されたものです。棚田の保全を通じて岩座神地区住民はその誇りと絆を新たにされました。

このような取組の延長線上にクラインガルテン岩座神があります。施設を建設することにより、都市住民との交流を密接に行い、地域の活性化、棚田の保全等を共通の課題として都市住民と一緒に考える場になるよう期待されています。

クラインガルテン岩座神の管理ついては、地元集落を中心とした岩座神棚田保全推進協議会が指定管理者として、常駐者を1名配置し、管理・運営を行っております。

また、入居者の方々でつくる自治会「いにしえの郷友の会」により入居者同士の交流も深められ、小規模ながらコミュニティが芽生えております。中には、定住にまで発展した契約者もおり、地元集落のイベントや共同活動にも参加し、地域の活性化に一役買っております。

クラインガルテン岩座神入居者や棚田オーナーが、地元のイベント活動に参加し、また、町のイベント等にも参加され、地域コミュニティ増進効果が今後も期待されております。

滞在型市民農園施設については、クラインガルテン岩座神の他に、多可町八千代区に3つ施設がございます。八千代区俵田の「フロイデン八千代」、八千代区大屋の「ブライベンオオヤ」、八千代区大和の「ブルーメンやまと」です。八千代区3つの施設につきましても、地元集落を中心とした管理組合を形成し、施設の運営を行っております。

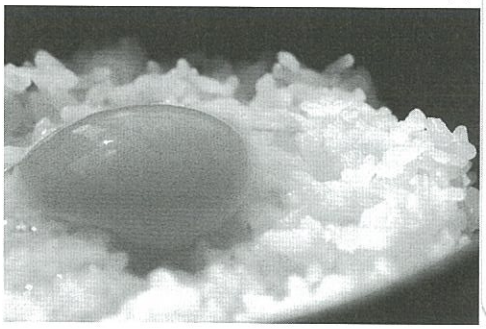
最後に、自然あふれる多可町の滞在型市民農園で、あなただけの「田舎」をぜひ見つけてください。

「卵かけご飯」が大ヒット中
～「黄福定食」から「黄福」なまちづくりへ～
●岡山県美咲町●

報告：美咲町産業観光課　課長補佐　川島聖史

「卵」でまちおこし

現在美咲町が展開する「卵」を目玉にしたまちおこしは、平成19年度から動き出しました。町の知名度アップのため、経費をかけず〝既存のモノで〟ということが、狙いで、「卵」に着目したのです。



その企画の第1弾が「卵かけご飯」の専門店のオープンでした。その専門店となったのは、町の第3セクターが管理運営する「食堂　かめっち。」。実はここ、当初「うどん屋」として営業を始めたが、数ヵ月で営業中止、数年間空き施設という状態でした。ここを再利用し、試行的なスタートではありましたが、美咲町を知ってほしいという思いから、「卵かけご飯」に関する〝素材〟はすべて美咲町産物にこだわりました。いわば、合併した旧3町のそれぞれの土地ならではの既存の〝宝物〟とちょっとしたアイデアから「卵かけご飯」が誕生したのです。

「かめっち。」の平成20年1月のオープン以来、予想をはるかに上回る人が訪れ、合併直後で知名度もなく、観光資源の少なかった町へ人を呼ぶきっかけとなっています。

当たり前なもので人が呼べるのか

当初、さまざまな論議がわきました。「卵かけご飯」って、あまりにも当たり前な食べ物で、どこの家庭でも簡単に食べることができ、そして誰もが食べたことのある「家庭の味」。果たして人が呼べるのか？　という声も町内外のあちこちでありました。

そこで、この事業で美咲町が大きく掲げたのが「地産地消」と「安心安全」。専門店のオープン後は、全国各地で立て続けに「食」の問題が明るみになり、消費者が食に対し不安を募らせる状況となり、地元の食材にこだわり、「安心安全」掲げた「卵かけご飯」が一躍注目されることになったのです（最近では、景気の冷え込みが続き、「安さ」を重視する傾向にあるなどの時代背景から注目を浴びたとも考えられますが）。

とはいえ、一番はどこの家庭でも味わうことができる「卵かけご飯」を美咲流のストーリーにしたことが『ヒット』した理由と考えています。

「卵かけご飯」の4つのストーリー

美咲流の「卵かけご飯」のストーリーは、大きな4本の柱から展開されています。①町内には西日本最大級の養鶏場があり、毎日約100万個の「コクとうまみ」のある新鮮な卵が産まれていること。②日本棚田百選に選ばれている棚田等では、先祖伝来の農地を荒らすまいと、農家の方の手間と愛情のこもった棚田米がおいしい空気とおいしい水に囲まれて作られていること。③地元産の醤油をベースにアレンジした3種類（ねぎ・しそ・のり）の特製専用タレを開発したこと。

そして、何といってもストーリーの主役は、④美咲町出身で、卵かけご飯をこよなく愛し、旅先でも卵を取り寄せて食していたという記述も残る明治時代を代表するジャーナリスト岸田吟香に着目したことです。岸田吟香は、日本の新聞界の草分け的存在として、また実業家としても活躍した人物で、「卵かけご飯」を全国に広めたとも伝えられています。

この取り組みは、専門店のオープン以来、多くのマスコミにも取り上げられ、また口コミでも広まり、北は北海道から南は沖縄県と全国各地から、18席の食堂ではありますが、2年間で14万人を超える人が美咲町を訪れるようになりました。

「黄福」なまちづくりへ

こうして生まれた「卵かけご飯」を〝黄福定食〟と名付け、300円で卵とご飯のおかわり自由としたのも人気の秘密かもしれません。現在、美咲町では、この取り組みの第2弾と位置づけ〝黄福定食〟にあやかり、〝黄福物語〟と名付けた町内に点在する観光地を〝線〟で結ぶ観光プランを計画中です。

〝黄福物語〟とは、名前のとおり、黄色をメインとした幸福なまちづくりで、町内に点在する観光地を「黄福」な〝モノ〟で繋ぎストーリー展開することと、町民イチ黄色運動という二本柱から、〝「黄福」なまち〟のイメージを作り、観光客の誘致を図ることが狙いです。

美咲町が目指す産官連携による「卵」を通じたまちづくりは、まだまだ始まったばかりで、今後は〝黄福〟をキーワードにした新たなまちづくりを展開していく予定です。町の知名度の低さや観光資源が乏しいことを逆手に、美咲町は〝人〟を呼ぶきっかけとして、新しい観光ストーリーが描けた形となっています。

まだ美咲町の「卵かけご飯」を食べられていない方は、ぜひ一度、美咲町へお越しください。お待ちしています。

おけさ柿はどうブランド化されたのか
～過去の事例から学ぶ～
●新潟県佐渡市羽茂●

レポート：石井里津子

まるはのおけさ柿
（写真提供：JA羽茂）

新潟県の佐渡島の〝おけさ柿〟。甘くとろける種なし柿として、いまでこそ、その名を全国にとどろかせているものの、かつては何も産物のない、島の農村から誕生したものだ。そこにどんなひらめきや苦悩があったのか、今年、齢90になるという「生き字引」と地元の人が称する藤井三好さんにおけさ柿の物語をたずねることにした。藤井さんは、町の役場職員として務め、退職後は、町教育委員会で町誌等もまとめた人物である。

舞台は新潟県佐渡市羽茂（はもち）。旧羽茂町として町一丸となり、柿づくりを一大産業に仕立てあげた地域だ。佐渡の南西部に位置し、羽茂川にそって水田も開け、海と背後に山間部を抱えた農山村である。

話は昭和初期。戦前にまでさかのぼる。

ＪＡ羽茂前の電話ボックスは、おけさ柿が飾られ、柿のまちをアピールしていた

藤井三好さんが語る、かつての羽茂（はもち）

「羽茂は、かつて農家は共同生産をするようなところではなかった。戦前、コメは国へまとめて出していましたが、雑穀類は、港町である隣の小木（おぎ）などから仲買商人が来て買っていました。仲買商人がどの農家へ行ってもこう言うんですよ。『よそでこの値段を言っちゃだめだ』と。まあ、隣より高く買ってやるんだから、人に話すなというわけです。でも、実際は隣より安く買いたたかれている。その結果、農家同士、隣が儲けると自分が損をしたような気分になる。そんな地域でした。

ですから、柿づくりは、個人から集団へ、という地域の変革なくしてはできなかったんです。柿づくりを指導するにしても、地域で人が集まる組織がない。そのため、集団指導ができる会をつくるところからはじめ、共同生産へと持っていったのです。それを手掛けたのが県農会の農業技術員の杉田先生でした」

「おけさ柿の父」――杉田清

杉田清は、「おけさ柿の父」とも称され、平成5年、89歳で羽茂に骨を埋めた農業技術指導者である。生まれは、同じ新潟でも豪雪地帯の中頸城郡安塚町中猪子田（現上越市）。大正12年4月、19歳で佐渡の小木町へ県農会の農業技術員として赴任した。藤井さんは語る。

「そのとき、杉田先生はとても驚かれたんです。雪を踏んで安塚を出て、その足で佐渡に来たら、青いムギ畑が広がっている。しかし、畑という畑はムギばかりで、野菜はみんな町外から買っていた。そんなことあるか、というのが出発点だったんです」

そこから杉田の、新潟ながらミカンも成るという南佐渡の「適地適作」探しがはじまった。5年間、小木で町内野菜の自給に取り組み、多くの指導を行った。

そして昭和2年、杉田は佐渡での務めを果たし、故郷に帰るはずだった。だが、小木の隣村の羽茂村長、田川寅松が彼を引き留めた。当時、村が総力をあげて農業振興を図らねば、昭和不況を乗り切れないと、羽茂村は優秀な実践者を求めていた。杉田もその思いを受け止め、羽茂に腰を据える決心をする。これが羽茂の運命を変えることとなった。

「地域のみんなが幸せになれるものを」

昭和不況で県も特産品づくりに力を入れていた。昭和6年には佐渡郡で「二十世紀ナシ増殖百町歩栽培計画」が立ち、島全域で二十世紀梨を特産品化する動きが出る。だが、羽茂の杉田が反対した。

藤井三好さん。大正9年生まれ。昭和16年に、旧羽茂町職員となる。杉田先生は町中のことをよく知っており、子どものときからお世話になったという

「杉田先生は、羽茂は平核無（ひらたねなし）柿をつくると突然言い出したんです。計画も滑り出していましたが、先生は譲らなかった。杉田先生が最も大切にされたことは、『この地域のみんなが幸せになれるものを』という一言に尽きました。

農家の幾人かだけが、うまくいったのでは意味がない。誰もが取り組めるものでなければならないということにこだわったんです。梨は栽培技術がむずかしく、みんなが成功するわけではないと見ていたのです。それに対し、柿は羽茂の上山田というところに十二が柿の古木が林になるほど、柿はあっている、と」

結局、羽茂だけが柿を導入することになった。だが、栽培すべき柿の品種を見いだせていなかった杉田を、田川村長は怒鳴りつけたという。しかし、村長が立ち去ったあとには50円という当時の大金が入った村長個人の財布があり、「直ちに調査に取り掛かれ」とメモもあった。

「杉田先生が柿と言い出した背景に、昭和6年10月、平核無の柿で人気のあった山形・庄内柿の原木が、新潟県新津市のとある庭先で見つかったというニュースがありました。これが、越後の七不思議の次に見つかったということで、『八珍柿』と名称がついた。このニュースを知っていたからこそ、杉田先生は、柿だとひらめいたのだと思いますよ。『新潟県

原産の柿を故郷に持ってくれば、庄内より良い柿ができる』と思ったんです。適地適作を求めていた先生が、10年目にしてようやく辿り着いた作物でした」

柿づくりは人づくりから

しかし、柿を畑に植えてくれと話しても「そんなもの畑に植えたら、ムギつくれん、麻畑がなくなる」など多くは耳を貸さなかった。広い畑の良い条件の場所に植える人など最初はいなかった。

「かつて先生はこう言われていました。『杉田先生は良い先生で、教えてくれるけど、だめだ。おれにばっかり教えてくれればよいのに、隣にも教えた』と。

そこで、先生は個人指導ではなく、集落ごとに『農区』をつくったんです。農区で地域会合を開き、集団指導をし、共同意識をつくっていきました。羽茂(はもち)はいい柿を見つけたもんだ、とよく言われましたが、良い先生を見つけたんです。人間が先です。ですから、わたしは杉田先生を見いだし、離さなかった田川村長も偉いと思うんですよ。

そして、杉田先生は若いもんに目をつけた。農業試験場で『農民農場』というのをつくりまして、そこで若い人たちを指導した。柿づくりは、まさに人づくりだったんです。杉田先生は教育者であり、実践家でした。さらに宮本常一先生（日本中を歩いた民俗学者）も何度も島を訪れ、指導してくれました。宮本先生は杉田先生と同世代で話が合い、お互いに尊敬しあっていました」

羽茂では、宮本常一を10数回招き、農家の意識を変えていったという。宮本常一という、離島振興にも力を注いだ、外からの人物の存在も大きかった。

現在出荷されているまるはマーク入りのおけさ柿。箱左上に柿色のマークが入る（写真提供：JA羽茂）

苦難を乗り越えて

昭和7年、羽茂ではじめて山形・庄内から持ち帰った柿の苗が植えられる。だが、苗木はうまく育たなかった。当初、接ぎ木がうまくいかず、杉田を悩ませた。だが、従来から羽茂にあった在来の品種の十二が柿を土台にしてみたところ、まさに「適地適作」とばかりにうまくいき、問題をクリアしていく。

そして昭和11年、はじめて札幌に向けて売り出す。4階級に選別し、木箱に詰め、1箱22・5kgで650箱だったという。なぜ札幌かというと、江戸時代から北前船で北海道へ味噌等を出しており、流通ルートがあったためである。

「明治時代には北海道開拓が進み、羽茂には味噌工場が並ぶほどでした。戦前、大豆は満州から安く手に入ったのですが、戦後はアメリカ大豆で、横浜から運ぶために採算があわなくなりました」

戦争で柿づくりも一時停滞する。

「昭和12年には日中戦争。太平洋戦争がはじまった昭和16年には統制経済に入り出荷が減り、昭和19年、ついに強制伐採でイモやカボチャ畑に変えられ、残ったのはわずかに3haほどでした」

だが、戦後の復活はめざましく、時代の波に乗り、おけさ柿は広まっていった。

「全体の質を上げるために、畑にも等級をつけたり、技術のある若手が『特別指導員』として、お年寄りや女性だけの家の畑を剪定して回ったり。そして、共同選果場へ出す前に、集落ごとに出荷場を設け、品質が合格しなかったものは返す仕組みもつくり、共同作業を進めることで、産地化が進められました」

「まるはマーク」が誕生し、ブランド化へ

現在、羽茂地域のおけさ柿はJA羽茂から出荷されているが、昭和22～25年は、地元庵原(いおはら)商店が一手に引き受けていた。藤井さんは、この庵原商店の庵原士郎氏が「まるはマーク」を生み出したのだろうと話す。

「農家は当初、意識が低くて、『八珍柿』というだけで売れるものだから、出荷する木箱の中に雑柿を混ぜる人もいたんですね。また、過熟したり、痛んだり。さんざんたたかれた。そこで庵原さんは、木箱に『まるはマーク』をつけ、木箱のなかに生産者の名前を入れて出荷しはじめたんです。文句があったら、この人に言ってくれとばかりにね。『まるはマーク』をつけたことで、品質も向上し、庄内柿より高く仕切ってもらえるようになりました。庵原士郎さんは、杉田先生がつくった農民農場を出た人でした」

さらに大きな契機となったのが、昭和29年からの東京の高級果物店千疋屋との取引である。農民農場の一人が千葉大学の全国果実品評会で毎年特別賞を得ていたことが千疋屋の目にとまったのだ。

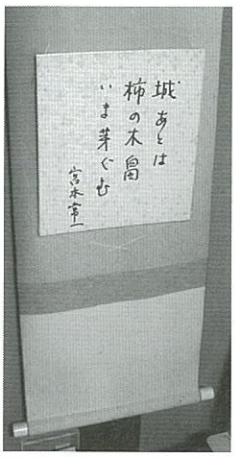
「ぴかぴかと光った大きなおけさ柿が、高級フルーツ盛り合わせのかごのてっぺんに一つ、乗せられて売られていました」

まさに高級果物としての地位を獲得したおけさ柿だった。これが東京をはじめ関東への絶大なアピールとなった。

変わっていく地域

昭和26年からは農協が流通を受け持ち、さらに行政がパイロットファーム等の開墾を行い、「地域の総力を結集」し、おけさ柿は高度経済成長期へと向かっていく。戦後わずかに3haだった柿畑が最高時350haに広がった。藤井さんは「ふるさとガイド7　おけさ柿物語」の終盤にこう記す。

「おけさ柿の真価は収穫量や金額だけでは



宮本常一直筆の色紙が、藤井三好さん宅に飾られていた。「いま芽ぐむ」とは、季語にとどまらず、「昭和45年当時の町の姿」だという

柿の剪定は、冬場も続く。柿農家、本間英郎さんは、雪の降る冬場も、朝7時前から畑で剪定作業をし、昼も弁当持参で山で過ごすとか

柿農家、本間英郎さん宅の前で、本間英郎さん（右）とJA羽茂の渡辺昌彦さん（左）

はない。樹園地農道や撰果場施設・羽茂港の貨物港としての港湾施設、みな底におけさ柿の大きな地下茎があってのことだ」。

そして、藤井さんは宮本常一に関する取材で訪れたノンフィクション作家の佐野眞一氏に選果場のうしろを指さしながらこう語っている（『宮本常一が見た日本』佐野眞一著より抜粋）。

「みてください。このうしろには、港があります。港につながる道路があります。人はよく柿の生産高や生産額だけをいいますが、大切なのは柿が港をつくり、道路をつくり、町をつくったことなんです」

いま、おけさ柿は佐渡市全域で栽培されているが、羽茂地域のおけさ柿だけは別格で、ＪＡ羽茂が「まるはのおけさ柿」として出荷している。

２００９年、まるはおけさ柿の出荷量は４３００ｔ。10年ほど前は６０００ｔを誇っていたが、近年は市場のニーズに対応し、柿以外の果物も多くつくるようになった。売り上げも平成初期の最高期には16億円あったが、現在は9億円。それでも一大産業に変わりはない。柿の作付面積は現在、ＪＡ羽茂管内で２６４ｈａ、柿農家は４１０人ほど。ＪＡ羽茂営農課、渡辺昌彦さんはいう。

「昭和後期、柿農家も約６００人、面積も３００haぐらいありました。柿畑は、山の斜面に多く、棚田を柿畑に変えたところもありました。傾斜地が多いため、農家が高齢化してくると、場所の悪いところは栽培しなくなっていますね。

いまはル・レクチェという洋梨など新しい取り組みが進んでいます。手間がかかるのですが、うちの管内でいま20軒の農家が3haで取り組んでいます」

挑戦し続ける現代の柿農家

縁あって、ル・レクチェを羽茂ではじめて栽培した専業農家の本間英郎（ひでお）さん（69）に会えた。羽茂のなかの村山という地域である。本間英郎さんは、冬の冷たい風の中、外で長時間仕事をするだけに頬が赤く、その屈託のない笑顔に人柄の良さがにじみ出ていた。

「親父は職業軍人でもありましたが、米と和梨のほか、戦前は農家が出資した合資会社で味噌と製材屋を営んでいました。でも、戦後は農業だけになりましたね。

わたしは昭和34年、高校を卒業してから農業をはじめました。柿は親父がその前からやっていましたが、田んぼを柿畑に変えたのは、わたしの代からです。当時は町中でパイロット事業が進んでいましたしね。自分で山を切り拓いたり、ムギ畑も多かったですが、すべて柿畑に変えました。

いま、柿と梨、リンゴを少し、2.5haほどでつくっています。多くは柿です。田んぼは1ha。かつては1.7haでしたが、0.7haを柿畑に変えました」

2haを越える果樹畑をやりくりしているのは、ＪＡ羽茂のなかでも4、5人という。柿農家として50年という本間さんだが、昭和56、57年ごろが最も収益が良かったという。

「そのころはサラリーマンに負けりゃあせんわ、と言ったもんです。コンテナ1杯20kgが良いときは７０００～８０００円。いまはその半分もないですね」

そして15年前、平成6年に羽茂ではじめてル・レクチェを植えた。

「わたしがはじめたんですよ。会合開いてみんなを集めて、ＪＡを通じて県の助成金もお願いしてね。県の方で注目していた作物で、いまは新潟県のブランド品目です。フランスの梨です。おかげさんで、いまちょっとしたものになりました。品質が良く販売単価は、3年連続で羽茂が県下一。柿とちがって個人で選果し追熟させて出荷しなければなりませんが、手間をかければかけるだけ、良いものができます。梨の剪定は柿の4倍ぐらいかかりますね。枝を誘引して棚にしばりつける整枝作業がありますから。ただ、柿は重く、高齢化が進むなか、やめてしまう人もいますよ。ル・レクチェは作業が多いですが、軽いのが良い点ですね。どうしてル・レクチェをはじめたか、ですか？　食べる人が、めずらしさに驚き、おいしさに喜び、香りに感激する。これが果樹をつくるもんの喜びですよ」

◎

かつて、おけさ柿のブランド化への道は、地域そのものをつくり変えた。人を、町を。杉田が、平核無柿を羽茂にもちこんだ昭和7年から78年のときが流れた。あれから地域はインフラも整い、開拓も進み、その後も国営のかんがい排水事業などハード面がつくりあげられている。

いまの時代、あの時のように、時代そのものに力があるとはいえない。だが、確かにいまも杉田が育てた農業への意欲と品質にこだわる高い志は、羽茂の農家に受け継がれている。

杉田のこだわり――「みんなが幸せになれるものを」そして「適地適作」。それは、いまの時代にも通用することではないだろうか。地域全体が幸せになってこそ、地域おこしが成功するのだと学ぶことができる。そして、そのために「人づくり」が伴っていたということも忘れてはならないだろう。

主な参考文献：『おけさ柿物語　羽茂町誌第一巻』おけさ柿物語編集委員会編（1985　羽茂町発行）、『おけさ柿物語　生涯学習シリーズふるさとガイド(7)』羽茂郷土史研究会編　藤井三好著（2002　佐渡市教育委員会羽茂事務所発行）、『宮本常一が見た日本』佐野眞一著（2001　ＮＨＫ出版）

山の葉っぱをビジネスに！

～「葉っぱの町・樫原の棚田」～

●徳島県上勝町●

報告：徳島県上勝町産業課長 桑原定夫

上勝町は、県庁から南西方向に40㎞（車で約50分）の位置にある。地形的には四国山脈の南東山地、標高1439mの高丸山を最高峰とする山脈が重なり、東流する勝浦川は、深い渓谷をなし、その流域に極わずかな平地が見られるほか、大部分が山地で山腹斜面には階段上の田畑があり、標高100～700mの間に大小55の集落が点在している。

本町の人口は、現在約2000人。高齢化比率が約5割の四国で1番小さな町である。総面積は109・68ha、うち85・4%が山林で、そのうち83・3%が杉を主体とした人工林である。

「彩（いろどり）」産業（葉っぱビジネス）

本町の「彩（いろどり）」産業（葉っぱビジネス）とは、上勝町がつくりだした新しい産業概念であり、紅葉、柿、南天、椿の葉っぱや梅、桜、桃の花などで、料理のつま物にする材料として商品化した物である。

およそ28年前、昭和56年2月零下13度の異常寒波が町を襲い、みかんの木が全滅した。当時農協で営農指導員（現在、㈱いろどり代表取締役社長横石知二氏）が、みかんに代わる作物を5年間ぐらい全国模索しているなか、昭和61年の秋にたまたま出かけた大阪の出張先のお寿司屋さんでの出来事が町の運命をかえることとなった。仕事仲間3人で食事をしていた時に、隣に座った若い女性3人組が、食事に飾られている山の葉っぱをみて「かわいい葉っぱ」「グラスに浮かべてみよう」「持って帰って押し花にしよう」と感動しているのを目の当たりにしたとき、「これだ！」と直感的にひらめきがはしり、これをやってみようと決心し、半信半疑でスタートした。

市場に出荷してみると5円、10円という価格、なぜ売れないのだろうと考える毎日、まず使っている現場を見なければ駄目なのではないかと思い、現場にいってみると葉っぱのもついわれやサイズ、料理人の気にしている部分などをつかむことができ、商品として何が大切かということが分かり、そのことを生産者にきめ細かく伝えた。

町の半数が高齢者、あまり前に出てこない女性たち、そんな状況の中にあって、軽い、美しい、お金になる産業として「彩」というキャッチフレーズを掲げて推進。採算割れ価格が少なくなってくるにつれ、その人気は急速に高まった。

町の一大事業に成長し「四季折々の美しさが感じられる」など町の女性たちにとって、この仕事は最高のものになっている。住民にとってやっと自分の町に誇りを持てるようになった。市場から農協に注文が入り役場の防災無線を使ったファックスシステムにより、注文が来たらすぐ伝達し商品をそろえる、まさに町の畑を商品棚としてイメージし「必要なものを」必要な時に「必要なだけ」取り出せるというシステムを構築できたことが、取引先にとって大きな魅力となり売り上げが急増していった。

それから高齢者専用パソコンの開発を手がけ、毎日のデータ管理、先読み、人の動き等を的確にとらえて伝える仕組みを構築した。この仕組みを導入したことによって自ら考える習慣ができたことが、驚くべき成果につながった。

上勝町で取り組んでいる1Q運動会やごみゼロ宣言などの取り組みも、この住民の考える習慣づくりが生んだものである。情報を見て考え自分のものにできる力をつけることができたことは、この事業の何よりの成果である。現在では330種類以上の商材を供給できる体制にあり、1年中野山にあるシャガを舟、鶴等に加工し〝翠（さら）〟として、野草の中で食べられるものを〝幸（さち）〟として出荷し、高く評価されている。

これらの生産物は軽量で女性や年輩の

方に大変喜ばれ、現在販売額は年間約2億3千万円（平成20年度）となっている。

194戸（PC利用127戸）の生産農家の販売単価や出荷数量などのデータを㈱いろどりで分析し、農家へ伝達。農家はこれを分析し、翌日の生産量や品目の選定の目安にしている。高齢になって体力が落ちても、その土地の者として持つ知識や経験も一つの地域資源。生産者の一人一人が最も得意とする品目を最大限に発揮させ、その分野では自分が主役であるという意識を高める。

田舎は今おもしろい。商品を売るのではなく、価値が売れるからだ。よく田舎は条件不利地域といわれるが、都会と同じことをするからであって田舎には田舎の良さがある。葉っぱの産業は田舎が断然有利なものだと農家が理解し「この町に生まれて良かった。今が一番幸せ」と思い頑張っている。

樫原の棚田

上勝町には、勝浦川の支流周辺に点在した集落とともに階段状に、多くの棚田が存在する。このうち、「樫原の棚田」は平成11年に日本の棚田百選に、平成22年2月に重要文化的景観に選定された。本町で平成23年に全国棚田サミットを開催する予定である。

町内の多くの棚田（＊1）も過疎と高齢化や高度経済成長とともに、水田面積は、約193ha（昭和45年）から約37ha（平成17年）になり80％減少し、人の減少とともに最近では耕作放棄地が特に山際で見られるようになってきた。水田に続く杉林の中に入ると昔、水田であった階段状の石積の姿があり、そこは植林された森林も管理されていないため、薄暗い様相を呈している。これが、今の棚田周辺である。

樫原集落の農地も、ここ35年間で減少が進んだ。林業と稲作により生計を営んでいたが、これが不可能になったので仕事のあるところへ人口は流出した。現存する樫原集落の水田・畑地の形状分布、里道の分布は、1813年絵図とほぼ同じであるといわれており、「樫原の棚田」を訪れると、少なくとも200年前の絵図の風景、あるいは330年前の水田耕作の風景を直接体験できる。

私の自宅は樫原集落の標高630m付近にある（＊2）。樫原集落（現在15戸）は、役場から約2km西方に位置し、旭川支流の樫原谷川を3kmぐらい上流の地すべり傾斜地に家が散在する集落である。昔は樫原谷川に沿ってあった小道が生活道であり通学道であった。

樫原の棚田は、四方を標高700～900m級の山々に囲まれ、隣接する集落とは峠道で結ばれる小宇宙的な空間として訪問者を迎える。樫原の棚田の農地勾配は1／4と全国の棚田の中でも、最も厳しい地形条件にある棚田の一つであり、おのずと一枚一枚の棚田面積も小さく、棚田一枚あたりの農地面積は、約1aから約2aの規模のものが最も多い。耕作は大変である反面、この棚田は美しい景観となっている。

樫原集落の棚田保全の取り組みは、平成7年に地元農家の有志が高知県梼原町で開催された第1回全国棚田サミットに参加してから「棚田を考える会」の発足、「水車小屋」の復元、「樫原の棚田村」の発足、平成16年の構造改革特区により「まるごとエコツー特区」が認められ、平成17年から「棚田等オーナー制度」が始まった。同時にワーキングホリディが始まり農作業や石積み等の棚田保全活動が活発に展開し始めた。

さらに、「重要文化的景観」地区の選定にむけて調査活動の取り組みが始まり、「樫原地区景観計画」及び樫原の棚田「文化的景観保全計画」が策定され、重要文化的景観の選定が決まった。樫原集落の住民は、ほとんど高齢者ばかりであるが、夜遅くまでの座談会や休日には用水路の出役、里道の草刈と棚田の保全はもとより集落を維持管理している。この思いが伝わったのか棚田オーナー制度等の保全活動に参加してくれる人が増えてきた。80歳代のおじいさんやおばあさんが加わり、頑張る勇気を与えてくれている。

棚田オーナー制度などに参加した方々と集落住民で毎年秋に行う田んぼの中での収穫祭は、樫原の棚田で獲れたお米を薪の火で炊き山野草を採取して天ぷらにし、豆腐も作って食べる。ほんとうにみんな家族のようで嬉しそうである。

近年、鹿が樫原集落に山から下りてきて、せっかく植えた稲や野菜などを食べてしまう被害が顕著になり、高齢者の営農意欲を失わせている。このことから平成21年から鳥獣害対策防止事業のモデル集落の指定を受けて昨年秋から今年1月末に、ほとんどが高齢者である集落住民の出役により、鹿の進入を防ぐため集落の周囲に防護柵を約5km設置した。

高齢者の根気はすばらしい。やればできるものである。これからの見回り点検が大変である。人と動物が共存できなくなり、生活圏の壁を作ってしまった。人間が檻の中で生活している気分になる。

年を追うごとに棚田保全は益々困難になっている。過疎高齢化が急速に進展する棚田地域では、「急勾配」「小さな面積」は一層棚田の保全を難しくしているが、棚田（樫原）に住み続けたい住民と棚田と絆を持つ応援いただける方々と協働で日本の原風景「樫原の棚田」の保全活動に果敢に挑戦し続けたい。

脚注＊1：神田集落周辺は棚田をわたるさわやかな風がお茶（神田茶）のかおりを運んでくる日本のかおり風景100選に平成13年選定され、上勝アート「もくもくもく」から見る「神田地域の棚田」の風景は美しい。ブナの原生林の残る高丸山を仰ぐ小高い丘の「八重地の棚田」は、平成20年に「にほんの里100選」に選定された。

脚注＊2：樫原集落にある私の自宅からは、秋から冬の季節、空気の澄み切った夜は、和歌山県御坊市近辺の海岸線の夜景が見える。自宅前の秋葉神社では旧暦の7月26日に三日月が一夜に続けて三度月が上がるという「三体の月」伝説があり、鑑賞会が毎年行われている。また、山犬嶽（途中に苔の群生地がある）への登山口がある。

サミットを機に企業など
～都市住民とつながって～

●愛知県新城市●

報告：鞍掛山麓千枚田保存会　小山舜二

四谷の千枚田は、鞍掛山（標高883m）の南西斜面に広がる石積みの棚田で、標高230～430mに位置し、平均4分の1という急峻な勾配であり、1枚あたりの面積が90㎡と狭小であり、また耕作道が狭く農作業は厳しいものがあったが、農家は700年の歴史を有する棚田を先祖が築いた偉大な財産として維持してきた。

棚田はかつて1296枚で水稲が栽培されていたが、平成初期には米余り対策、経済成長のあおりを受け、棚田は373枚までに減少。先祖から受け継いだ棚田の急激な減少・荒廃に危機感を抱いた筆者は棚田を後世に伝えるべく、1991年から棚田写真展などを通じて、棚田の保存と景観保全を広く地区内外に訴えた。こうした活動を基に「鞍掛山麓千枚田保存会（＊1）」が発足して、行政との連携による棚田保存活動と地域の活性化への取り組みが開始された。

2001～2002年度にかけて、「ふるさと水と土ふれあい事業」により軽トラックの通れる耕作道（景観道）や、ふれあい広場、四阿など、ふれあい交流施設が整備され、営農作業環境や生活環境が改善された。これを契機に、四谷地区において「田吾作（＊2）」、「棚田っ娘（＊3）」、「連谷お助け隊（＊4）」など棚田保全・維持や交流を支える自主的活動グループが相次いで発足し、活動の輪が広がった。かつて373枚まで減少した棚田は、現在、農家22戸と支援者を交え、420枚まで復田、作付けされている。

さらに2003年9月から広報誌「四谷の千枚田だより」を毎月発行。棚田を核としたむらづくりをアピールしている（現在78号）。こうした活動は、全国サミット招致運動にまで発展し、第11回全国棚田（千枚田）サミットを開催、地域ぐるみで成功に導いた。

サミット成功を機に、地区内の活動の活性化のみならず、棚田と景観の保全に向けて、ボランティアの受け入れや農業体験など都市住民との交流と連携が次々と生まれている。

【連携している機関及び協力状況】

・∧新城市鳳来総合支所地域整備課∨関係機関との連絡窓口、市内での普及・啓発
・∧連谷小学校∨農業体験、生きもの観察、生きもの保全
・∧連谷公民館∨地域交流
・∧連谷コミュニティ∨地域交流
・∧地域外の支援グループ＝河西グループ、稲作プロジェクトチーム（現CCグループ）等∨営農及び営農支援
・∧JA愛知東（管内：新城市及び北設楽郡、本店、新城市、組合員数　正8645戸、准3999戸）∨こども農学校による農業体験：千枚田においては田植え、田んぼ観察、稲刈り
・∧豊橋調理製菓専門学校∨実習田による農業体験
・∧企業：アストラゼネカ製薬会社∨草取りなど環境整備
・∧企業：横浜ゴム∨新入社員研修（草取りなどボランティア活動）

さらに山里の魅力を売り出す

今年愛知県でCOP10が開催されるが、COP10で活躍する千枚田をアピール。すでに、6回の自然観察会の申し入れがある。その1つとして10月23日、外国からのCOP10参加者を棚田の魅力と文化、イベントの交流を行う。

また、アサヒビール株式会社による自然観察会も開催予定。同会社のスーパドライのコマーシャル第2弾、第3弾とも千枚田の映像が使用される。スーパードライ1本につき1円がCOP10に寄付されることになっている。ちなみに先日、1億4000万円が愛知県に寄付された。

そのほか、メディア関係へ昨年度はNHK3本を含め15回以上テレビ出演。新聞発表多数等々行うこともアピールへとつながっている。

豊橋調理製菓専門学生の農業実習

【連携年表】

- ■2001年　連谷小学校が総合学習で農作業体験。保存会と連谷小学校が連携し、生きもの観察会を実施（以降毎年）
- ■2002年　地元耕作者を主体に「田吾作」発足、借地による有機栽培を実施
- ■2003年　連谷小学校が生きもの調査、希少動物の保全活動実施。支援組織として地域外の「稲作プロジェクトチーム」（学生等）が千枚田の援農を開始
- ■2004年　四谷地区及び連合地区の青壮年を中心に「連谷サミットお助け隊」発足（活動継続）
- ■2005年　JA愛知東が「こども農学校」を開設し、千枚田で農業体験開始。第11回全国棚田サミットが四谷千枚田で開催
- ■2006年　「三河の山里ツーリズム」による千枚田の稲作体験ツアー開始。「連谷お助け隊」が「みんなで灯そう千枚田」を実施。企業から初めて環境整備ボランティア受け入れ（製薬会社アストラゼネカ）
- ■2007年　環境整備ボランティア受け入れ（横浜ゴム新城工場新入社員研修）
- ■2008年　豊橋調理製菓専門学校生の農業実習始まる
- ■2009年　田園自然再生活動コンクールで農林水産大臣賞受賞

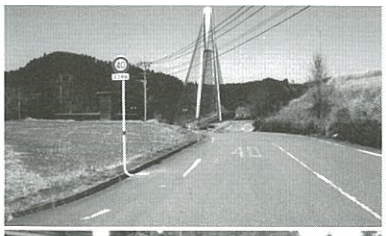
＊1：鞍掛山麓千枚田保存会は、1997年設立、会員29名。棚田の保存、保全活動を通した地域活性化を行う。
＊2：田吾作は、2002年設立。地元耕作者が耕作放棄地の解消を目的に無農薬、有機栽培を実施。山都共生の理念から稲作体験なども積極的に受け入れてきた。
＊3：売店の会「棚田っ娘」は、会員29名。棚田へ訪れる人々に地産の五平餅や野菜など、直売を通じた交流や地元のPRを目的に農繁期に開店。
＊4：連谷お助け隊は、2004年設立、23名。第11回棚田サミット成功を願い、校区内の若者23名で発足。サミット成功を余韻に地域活性化を主眼に環境整備、ボランティア活動など活躍している。その一つロウソク1500本を灯す「お田植え感謝祭・灯そう千枚田」を開催。

集落で直売所運営

～山里の良さを売り出す～

●熊本県山都町菅●

（菅地域振興会）



写真左上：緑川農免農道でもある「鮎の瀬大橋」
写真左下：地域の人も集う、鮎の瀬交流館
写真上：鮎の瀬交流館で扱う郷土の味

熊本県山都町（旧矢部町）菅（すげ）地域。戸数84戸。集落の標高はほぼ450mに位置する。緑川が眼下に流れる深い渓谷に阻まれ、かつては「陸の孤島」と呼ばれていた地域だ。集落とてこうした地理的条件の不利を黙って見てきたわけではない。昭和47年、地域の活性化を目指し、集落全戸で「菅地域振興会」（以下、「振興会」と表記）を発足させ、つねに前向きに活動を進めてきた。

そんな集落に大きな転機が訪れる。集落を「陸の孤島」にしてきた深い谷に橋がかかることになったのだ。昭和56年、県が道路整備に着手。平成6年、「鮎の瀬大橋」建設開始。これを契機に「振興会」は、「自分たちの地域は自分たちの手で」という意識へと変わっていったという。

その活動には、自分たちで地域を歩いて地元を見直した「ふるさとウォッチング」もあれば、県のアドバイザーを招いて、地域のアイデンティティを探し、スローガンを見いだした活動もあった。そこで生まれたスローガンが「山里のやすらぎ」だった。「山里のやすらぎ」こそが、菅地域の最大の魅力であり、それを暮らしの喜びとしてきたというのだ。この魅力を都市住民に向けて発信し、地域を活性化させることになった。

平成8年、橋が完成する4年前、「棚田オーナー制度」を開始する。高知県檮原町にも視察に行った。視野は、谷の向こうへと延びていた。そして平成12年8月、「鮎の瀬大橋」開通。夢の大橋の完成だった。「振興会」会長の渡邉正弘さんはいう。

「橋は地域の念願でした。橋がかかったことで地域が大きく変わりました。交流ができるようになったからですね。橋を渡ってたくさんの人が来るようになって……。われわれも都会の話も聞かんといかんですからね」

人々は、菅の美しい棚田を見に来るのだという。秋には美しい山の紅葉を求めてやってくる。そして、橋の開通にあわせて平成12年に建てられた、地域の特産物を扱う直売所兼食堂の「鮎の瀬交流館」は大勢の人で賑わうようになった。建物は、町（旧矢部町）が建設しているが、運営は地域で行わねばならない。運営の委託先である「振興会」渡邉会長は、この交流館の館長でもある。

「運営を丸ごとまかされていますから、赤字にならないようたいへんです。婦人部でつくった『山里の会』手作りの『おしよせコロッケ』などを置いています。『おしよせ』というのは、菅だけに昔からある料理で、大豆を挽き割ってすったものにお米や野菜を入れて煮たものです。これを『山里の会』がコロッケにしたわけです。ほかに、豆腐の味噌漬けなどの加工品もありますし、ゼンマイやワラビ、タケノコなどを干したものを置いています。こうした乾物は、ばあちゃんたちのお小遣い稼ぎにもなって、喜ばれています」

さらに、ここは食堂でもある。棚田米を使ったおにぎりやうどん、そば、イノシシ汁など地場の味が好評だ。お客は熊本市内が多い。橋がかかって、かつては2時間以上かかっていた熊本市内からも車で1時間半あれば辿り着けるようになった。現在、高速道路の計画もあり、これが開通すると熊本市内から1時間もかからなくなるという。

交流館は年中無休。なぜ年末年始も開けるのかとたずねると「里帰りの人のためです。ここのものが置いてありますからね。また、饅頭もここの特産ですが、これを町内のお店に卸していて、年末年始も配達しなくちゃなりませんしね」と渡邉さん。

鮎の瀬交流館は地元のための施設でもあるのだ。確かに、集落の高齢化率は50%を越える。後継者も一見少ない。しかし、橋ができて、熊本市内等に出ている子どもたちも帰ってきやすくなった。土日には農作業を手伝いに帰ってくる人が多いという。

また、棚田オーナーのなかには、菅の新鮮な野菜を近所に広めたいと、熊本市内の自宅で「野菜市場」を週2回オープンする人も出てきた。まさに、山里と都市の〝橋渡し〟である。

「振興会」の活動はつきない。秋には「棚田ツアー」を開催し、稲刈り体験を希望する都市住民を招き入れる。そして随時、菅の山里の良さを求める都市からのバスツアーを受け入れている。平成17年からは地元の農産品である「お茶のオーナー制度」も開始し、茶摘みから加工も体験できる。そのほか、振興会では地域にもみじの木を植えるなど、山里の魅力をみがき続けている。この3月21日には、「鮎の瀬大橋」開通10周年記念イベントを開催し、ウォーキング等で賑わう。ますます菅の山里の魅力は広がっていくようである。それもこれも菅の人たちが全戸一丸となって、昔から大切にしてきた「山里のやすらぎ」の良さを見失わずに、大切に交流を進めてきたからだろう。

COP10とは？
（生物多様性条約の第１０回締約国会議）
棚田との関係は？

COP10実行委員会アドバイザー
名古屋市立大学大学院准教授　香坂　玲

コケリンドウ（大山千枚田保存会　浅田大輔撮影）

今年の10月に愛知県名古屋市において、生物多様性条約の第10回締約国会議（ＣＯＰ10）が開催される。２００９年12月のコペンハーゲンでの気候変動枠組条約の第15回締約国会議（ＣＯＰ15）と同様に、発展途上国と先進国の間の課題や、地球規模での生物多様性の保全についての話し合いを行われる予定だ。

２０１０年までに生物多様性が悪化していくスピードにブレーキをかけていこうという２０１０年目標自体の達成は危ぶまれているが、一方で条約のなかで目標が存在していたことによって、政府、企業、市民社会が目標に向けて資金や人材の育成を行ってくることができたという一定の評価する声もある。10月の愛知県名古屋市での会合では、２０１０年目標以降について、今後10年40年というスパンで議論が交わされる予定だ。

さて、生物多様性というと、ずいぶん堅い響きだが、我々にとって身近な田んぼや里山でも接してきた、非常に身近なものである。田んぼのなかには、食べたり、食べられたりという連鎖から、さまざまな役割を果たしている虫などが存在する（人間には害があったり、なかったりし、大多数はあまり関係がない）。農業と生物多様性という議題も条約のなかではあるし、内陸水など水に関わるトピックでも、農薬の使用など水への影響などが議論される。

大阪府能勢町の里山（森田尚撮影）

さらに、日本は里山をテーマとしたイニシアティブを通じて、日本の地域社会や伝統的な知識、人手が加わることで維持されてきた生物多様性も存在するということをアピールしている。世界的には、欧米を中心に「農業は環境には良くない」という厳しい視線が向けられている。確かに原生林を開拓するなど土地利用の変化を通じて悪影響を及ぼしている地域もあるが、棚田や水田などやり方次第では、生物多様性を保全しながら持続可能であるような利用が可能であることを実証していくことで国際的な議論に一石を投ずることができよう。

日本各地で棚田が作られ、維持されてきて、いま、さまざまな課題に直面しているということも世界にとっては関心の高いことだ。私のドイツ人の友人でも棚田を専門に聞き取り調査をしている研究者がおり、個人的にも世界的な関心の高さを感じる機会が多い。

【近著】

『いのちのつながり よく分かる生物多様性』　中日新聞出版　Ａ５判オールカラー　２０４ページ
http://www.chunichi.co.jp/book/shoseki/chu200904280l.html

『森林大国カナダからの警鐘―脅かされる地球の未来と生物多様性―』　Ｊ・ＦＩＣ日本林業調査会
http://www.j-fic.com/bd/isbn978-4-88965-190-4.html

Topics

丹後・棚田フォーラム開催される！

京都府立大学生命環境科学研究科　助教授　中村　貴子

2010年2月4日、京都府丹後農業試験所にて京都府丹後広域振興局主催の「【丹後・棚田フォーラム】　棚田のいま、これから」と題して、棚田について考えるフォーラムが開催されました。約70名の参加者を迎えて、熱心に討論が行われました。

最初に、京都大学東南アジア研究所安藤和雄氏が「アジアの中山間地農業から棚田農業と日本の保全活動」と題して、次に中村均司丹後農業研究所所長が「丹後の棚田における「こなわ・かんだ」の役割」と題して講演を行いました。

安藤氏は、「棚田はアジアの原風景であり、生産基盤としての力強さを魅せている。石油・水を守るだけではなく、自前の食糧を作ることが真の平和貢献につながるのではないか」と力強く語られました。中村氏は丹後の水田に見られる小水路の機能に着目し、「京都府では小水路が見られるのは丹後半島だけである。気温が低い丹後ならではの工夫で、用水温の上昇、また浸透水の防止と排水対策、用水の確保、水量の調節、除草剤の効果の向上の役割を果たしている」と実証しました。

続いて宮津市上世屋に移住し、棚田の複田を行ってきた井之本泰氏から「上世屋における棚田復活と稲作の取組」と題して、また大阪で米屋を営んでいる福満敏博氏から「新井千枚田での「都市農村交流」稲作と棚田保全」と題して報告がなされました。

井之本氏は、上世屋で高齢のおばあさんと出会ううちに、「草刈だけでもして欲しい」と頼まれ、同じ保全をするならば、複田をして、棚田の管理を他の人の力も借りて守っていけばよいとの発想で、「合力の会」を結成し15aを始め、その後新たに15aを複田し、他地域の人から力を借りて耕していると報告しました。福満氏は大阪の米卸会社の人たちとともに田植え体験を実施し、10年目を迎え、現在はさらなる会員増加をよびかけ、今ある棚田は保全していけるよう努力しているところ。地元の人との交流が楽しい」と報告されました。

最後に報告者全員がパネラー、中村（筆者）がコーディネーターとなり、「棚田のいまとこれからを考える」と題したパネルディスカッションを行いました。最初に、中村から棚田の多様な価値の1事例として、水田が生物多様性を育む場としてラムサール条約に認められているところがあると紹介しました。

安藤氏からは「日本の農村へ外国の人を連れていきたい」、中村氏からは「水問題は食糧問題に通じる。昔からの知恵はすごい」、井之本氏からは「こだわりの参加者が参加者を呼ぶ」、福満氏からは「子どもが棚田をイネの森といった言葉に関心。子ども目線では確かにそうである」といった生産とは違う棚田の価値が各パネラーから語られました。

また会場からは、棚田の話だけでなく、生きる上で農村がいかによいところかという議論にまで発展しました。最後に、「棚田は生きる哲学を考える素材として有効であること」「棚田のある風景を守っていくためには、福満氏の発言にもあったように「若者、ばかもの、よそもの」を受け入れる地域を作っていくことではないか」との提案をして閉会しました。

新井棚田

新しく自治体会員が増えました

新潟県三条市 ―北五百川の棚田―

三条市は、新潟県のほぼ中央に位置し、人口は約10万5000人、面積は約432㎢で北西部は信濃川の沖積平野として肥沃な農地をもち、信濃川と合流する五十嵐川が市域を縦断して流れており、下流域では市街地が形成されています。

下田地区には、壮大な垂直の大岩壁「八木鼻」という景勝地があり、その奥に1995年農林水産省の「日本の棚田百選」に選定された北五百川の棚田があります。

ここは、奥に粟ヶ岳、前方には守門岳が望まれ、下方には集落と棚田を取り巻く景観は絶景です。百選に選ばれてから、カメラマンや観光客も訪れるようになり知名度が上がった反面、山菜とりの入山や路上駐車などの不安も増えましたが、選定されたメリットを生かし、人が来る活気づいた集落に向けて地域が一体になっています。

一昨年の11月に、東京の表参道「新潟館ネスパス」のイベントで、棚田の生産者の佐野誠五さんが北五百川の棚田米の直売を行ったところ、60キロは即日完売で120キロの追加注文があるほど好評でした。佐野さんは「うちの米は、飲める水で作っているので安心安全です」と話すように、食の安全が叫ばれている現代において、このようなPRは都会の消費者に強いインパクトを与えたようです。なお、北五百川の棚田米は「安心安全」だけではなく「うまい」（玄米タンパク質の含有率が6.5%以下のため）ということも付け加えさせていただきます。

下田地区出身者で組織する「東京下田郷人会」の「ふるさと訪問ツアー」で、15人の出身者が棚田で稲刈り体験をされました。会長の山井さんは「素晴らしい景色。われわれの年代になると、ふるさとは遠くなるけれど、思いは募る一方だからね」と、鎌を持ちながら言われました。今も昔も変わらぬ棚田でこそ、このような思いになるのではないでしょうか。

また、現在県内外25人の方が棚田オーナー制度を利用して、美味しいお米の契約はもちろんのこと田植や稲刈りの体験をするなど好評を得ています。

地元の皆さんは棚田の斜面に花を植え、周りの山林を間伐するなど景観に配慮して訪れる人達の目を楽しませています。去年の5月には、「北五百川棚田を愛する会」を結成し、棚田の頂上に設置した東屋をステージに「北五百川棚田コンサート」を開催しました。出演者は地元のアマチュア演歌歌手やバンドで、ご当地ソングの「三條慕情」をはじめ聞きなれた曲を披露し、約200人の入場者があぜ道に腰をおろして、大自然の中の生演奏で楽しい時間を過ごされました。

各地の棚田にも多くの魅力があるでしょうが、ぜひ三条市北五百川にも足を運んで棚田の魅力を満喫してください。

（三条市農林課　鈴木　潔）

全国棚田（千枚田）連絡協議会の自治体会員は現在57市町村です。棚田の保全・利活用、また中山間地域の活性化を目指しています。

事務局ニュース

事務局、長崎県雲仙市からのお知らせコーナーです

平成22年1月28日、東京砂防会館をお借りして、全国棚田（千枚田）連絡協議会の幹事会および理事会を開催いたしました。

昨年10月に行われた新潟県十日町市の第15回全国棚田（千枚田）サミットの報告をはじめ、議事として今年静岡県松崎町で行われる第16回のサミットの開催要綱等についての提案がありました。

現在、平成23年第17回の徳島県上勝町、平成25年第19回の和歌山県有田川町でのサミットの開催までが決定しているところですが、第18回および第20回以降の開催地が未定の状態です。

今後も棚田保全・振興のため、棚田サミットが毎年円滑に行われるよう、会員のみなさまをはじめ、関係者の方々のご協力をお願いいたします。

また、幹事会・理事会翌日の29日、農林水産省および棚田振興議員連盟に対し、中山間地域に対する各種法制度の継続要望を行って参りました。

「中山間地域等直接支払制度の強化」、「中山間地域における米戸別所得補償制度の充実」、「中山間地域の活性化支援」について、中山間地域の現状を交えながら説明し、強く要望をしたところです。

さて、早いもので事務局を仰せつかってから一年が経ちました。サミットの開催等を通して新しく会員になっていただいた方、残念ながら諸事情により退会をされた方、そして棚田保全、振興の活動・支援のため会員としてご協力いただいている方。いろんな方と関らせていただきました。こちらの力不足により各方面にご迷惑をおかけし、まことに申し訳ありませんでした。

来年度は新潟県十日町市へとバトンタッチいたしますが、棚田の活性化、協議会会員の確保等、課題は数多く、みなさまのお力が不可欠でございます。

今後とも、協議会の運営、サミットの開催へのご協力のほど、何卒お願いいたします。

BOOKS

今回の特集「山里の魅力を売り出す」にも通じるシリーズをご紹介。企画監修、農林水産省中国四国農政局の「まんが農業ビジネス列伝～食と農の未来を拓く挑戦者たち」。本紙p8、9でも掲載した徳島県上勝町の「彩（いろどり）」もテーマの一つだ。

現在11冊発行されており、中国四国の各県の特徴ある農業ビジネスをわかりやすくまんがで紹介してある。農業ビジネスのドラマが、各地の若い描き手たちによってまんがで描かれ、ユニークなシリーズとなっている。

発行元は（社）家の光協会。A5サイズ　56ページ　定価：本体333円＋税。シリーズ内容は以下の通り。

『まんが農業ビジネス列伝～食と農の未来を拓く挑戦者たち』

①：鳥取ナシ物語～黒斑病克服から輸出促進まで～（鳥取版）
②：農のはぐくむもの～木次の牛乳作りを通じて～（島根版）
③：ピオーネ王国への道（岡山版）
④：できたぞ！フルーツの森～平田観光農園物語～（広島版）
⑤：食の安全・安心の現実に挑む～秋山牧園物語～（山口版）
⑥：葉っぱがお金に化ける?!（徳島版）
⑦：ドリーム～さぬきの夢2000開発物語～（香川版）
⑧：からり～切り開かれる新しい農業の未来～（愛媛版）
⑨：天然ユズが村を救った～馬路村農協の軌跡～（高知版）
⑩：耕作放棄地解消！放牧大作戦～舌刈りで一石五鳥～（山口版）
⑪：炊きたてご飯は棚田米～南国市学校給食の歩み～（高知版）

■『葉っぱがお金に化ける?!』

「おじいちゃん、おばあちゃんが主役の『つまもの』事業が各方面で大注目！　高齢者がいきいきと働き稼げるシステムを構築した、元気な高齢化社会実現の先駆け的山村」（シリーズ紹介解説より）2007年発行

■『耕作放棄地解消！放牧大作戦～舌刈りで一石五鳥～』

「牛の『舌刈り』で耕地がみるみるよみがえる。効果は絶大、一石五鳥。だれでも簡単に取組ことができる『山口型放牧』が、耕作放棄地解消の切り札として今、各方面から注目を集めている」（シリーズ紹介解説より）2008年発行

■『炊きたてご飯は棚田米～南国市学校給食の歩み～』

「『炊きたての地場産米を子どもたちに食べさせたい！』教育長らの熱い思いは、やがて周囲を巻き込み、地域を変えていく。棚田を守り、子どもたちの食への関心喚起に成功した南国市の「食育」の取組を描く」（シリーズ紹介解説より）2008年発行

会員募集中

棚田の保全・中山間地域活性化のための全国組織

全国棚田(千枚田)連絡協議会

お申し込み・お問い合わせは協議会事務局

長崎県雲仙市　観光物産まちづくり推進課

〒859－1107　長崎県雲仙市吾妻町牛口名714
TEL：0957・38・3111
FAX：0957・38・3514

協議会 HP:http://www.yukidaruma.or.jp/tanada/

新しく会員になったみなさま

＜自治体正会員＞　新潟県三条市

編集後記

今回の特集はいかがでしたでしょうか。棚田保全というと、棚田ばかりに目が行きがちですが、中山間地域活性化が大きな課題ですから多様な角度から各地の情報をご紹介していきたいと思っています。多くの方にこうした情報を知ってもらいたいのですが、現在、ライステラスは会員の特典として配布されるほかに、マスコミや関係機関に贈呈する形となっています。「一般向けに売り出すと、良いアピールになると思うがどうか…」といった声も届いています。編集部だけでは力不足ですが、みなさんと議論しながら、もっと広く棚田地域や中山間地域の情報を発信し、理解を深めてもらう方法を模索できれば良いと思っています。　石井里津子

国の重要文化的景観に選定!!

姨捨の棚田　　急傾斜面に拓かれた棚田の代掻き

長野県千曲市ー姨捨（おばすて）の棚田

長野県千曲市にある名勝「姨捨（田毎の月）」は、棚田として我が国で初めて名勝として文化財に平成11年に指定されました。平成22年2月22日付けで、「姨捨の棚田」64.3haが、国の重要文化的景観の選定を受けました。今回の選定では、標高460～550mの急傾斜地に展開する約1500枚の棚田をはじめ、棚田の水源として大切なため池の大池、棚田までの用水路としての役割をはたしている更級川、名勝指定地を含めた範囲が選定されました。

姨捨の棚田は、今からおよそ500年ほど前の近世初頭から、沢水を利用して水田が造られ始め、江戸時代にはため池が整備され、また用水路が網の目のように整備された近世末期から近代にかけて、日本を代表する棚田の文化的景観を育みました。これまでの、先人の労苦に敬意を表するとともに、今日も営々として耕作されている耕作者のみなさんに感謝するものです。棚田景観は、耕作することによって、四季折々の景色を私たちにもたらしてくれます。姨捨の棚田においても、約2割ほどの耕地が荒廃化しているのが現状です。狭く屈曲した区画、農道も用水路も田越しで行なわなければならないなど、さらに急傾斜の大きな畦の除草作業は、危険な重労働となっています。こうした耕作条件や耕作者の高齢化も重なり、棚田景観の維持はたいへんな現状です。重要文化的景観に選定されたことを契機に、耕作者はじめ、地域住民・市民、行政、さらに広範なみなさん方のご支援・ご協力を得て、棚田での農業の継続ができる仕組みを早急に構築していくことが、「姨捨の棚田」での大きな課題です。（千曲市教育委員会　矢島宏雄）

「田植の朝」撮影：今出光俊氏

徳島県上勝町ー樫原の棚田

平成21年12月、文化審議会による答申により「樫原の棚田」は、国の新たな文化財である重要文化的景観として認められました。

今回の重要文化的景観の選定申し出のために、平成17年から様々な調査を行ってきました。そうした種々の調査の結果から、樫原の棚田景観の美しさを根底で支える歴史・地理・民俗などの価値を明らかにしてきました。棚田を生活の場としてきた人々にとって「あたりまえ」だったことに価値が見いだされ、外部から評価していただいたことが、ふるさとに対しての新たな自信と誇りにつながるのではないかと期待しています。

重要文化的景観の選定によって、高齢化や後継者不足など棚田が抱える問題が直接解決されることは難しいでしょうが、今回の選定は棚田を思い、守ってきた幾世代もの人々の努力に対する感謝状であるとともに、守り続けていく世代への灯明となって欲しいと願っています。

（上勝町教育委員会　新開晴美）

平戸島の文化的景観（獅子の棚田）

長崎県平戸市ー平戸島の棚田と生月島

平戸島の水田は、河川を中心に海岸から山間部まで分布しています。これらの谷に広がる棚田や丘陵地の牧野が、居住地と一体となった良好な農漁村集落が広域に連続していることが特徴です。また、絵図・文献・発掘調査等を通じて考古学的遺構や、景観形成の過程を確認することができ、16世紀のキリスト教布教以降、厳しい弾圧に耐え、当時の信仰形態を継承する「かくれキリシタン」信仰が残る地域でもあります。

本地域の文化的景観は、島という地勢を生かしながら農地や居住地を形成してきた農漁村集落としてのあり方を示すとともに、各時代において引き継がれ、発展してきた様々なタイプの信仰が融合しつつ独自の文化的伝統を生み出し、この伝統に基づく社会的・空間的な特性を示す貴重な文化的景観として評価を受けました。今後は、文化的景観をまちづくりのツールのひとつとして活用したいと思います。

（平戸市教育委員会　植野健治）